

社会参画をめざした問題解決学習の授業づくり

～着目児の変容をとおして～

梶本 久子

戦後社会科の創生期には、経験主義の問題解決学習が数多く実践された。しかし、展開された問題解決学習に対しては、はいまわる経験主義による基礎学力の低下、教師の指導性の後退など問題が指摘された。今回、自分自身の実践を先行実践と比較検討したところ、地域教材の出合わせ方と社会参画の仕方、問題の内容の精選から、よりよい授業づくりが構成できるのではないかと考えた。そこで、本研究では、小学校総合的な学習と関連した社会科において、子どもたちが切実になる問題をとおして社会参画をめざした新しい問題解決学習の授業デザインを考え検証した。2つの単元における着目児の変容過程と、代表的な2授業のあり方と評価について分析し、角度をつけた地域教材やプロジェクト型の学習における認識面の育ちや本研究のねらいであった多面的・発展的な思考力の高まり、社会好きの子を育てる授業について明らかにした。

キーワード：問題解決学習、社会参画、着目児、授業分析、プロジェクト型学習

1. 研究目的

本研究でめざす子どもの姿

本研究では、1年間をとおして4名を着目児とし、その子の思考の流れや変化、他の子どものかかわりを2つの単元を中心に変容を追いながら、子どもたちが「ひと・もの・こと」とどのようにかかわっていくかを見とることにした。そこで、本授業デザインの有効性を検証するための観点として以下の3点を挙げる。

- (1) 社会科の好きな子どもに育てる。
- (2) 多面的な視点をもって考える力を育てる。
- (3) 発展的に考える力を育てる。

これらのねらいをもとに着目児を設定した。また、このねらいは、本校研究テーマ「問い続け学び続ける子どもたち」のねらいでもある。そこで、本研究での仮説を次のように考え、どのようにして向かっていけばよいかについて、2実践を検証していく。

社会参画をめざした問題解決学習の授業を実現することによって、多面的・発展的な思考力が育つだろう。

1. 1. 着目児とは

着目児を設定することは、ある子の視点から授業を問うことであり、そのことは「ある子とその周りの子の質」を問い返すことにつながる。なぜなら、教師と子どもがともに育ててきた学級風土そのものを問われるからである。そのためにも、教師は周りの子どもとのかかわりを動的に問い直しながら、その子どもの思考の流れや変化、他の子どもとのかかわりを追いつけることが必要となる。そのような営みがあるからこそ、着目児の思考から問題を設定し、問題に対して着目児の追究の仕方、変容をみることができ、目標を達成したか具体的にみることもできるのである。

つまり、社会科提案にもある着目児の「わからないことから、わからないことへ」の思考を見とることによって、クラス全体の子どもたちが問い続け、学び続けていけるように支援していくことができるのだ。

ゆえに、子ども理解というのは動的に子どもをとらえることが必要で、一面的にとらえ方をしないように、教師自身も常に創造性の豊かな問題解決をしていかなければならない。そして本授業づくりをとおして、子どもたちが複数の視点を持ち、多面的に判断、意思決定していく力、発展的な思考ができる力を育てていきたい。

1. 2. 単元実施前の着目児の姿

観 点	洋介	蒼汰	あい	凌
(1)社会科が好きである	○	△	○	×
(2)多面的視点をもつ	×	○	○	×
(3)発展的思考力がある	○	×	○	×

以下に挙げる4名（洋介・蒼汰・あい・凌）の着目児の変容過程を検証していくことにより、本研究の有効性が検証できるのではないかと考えた。

① 洋介

話し合いや社会科が大好きで、友達の発言を受けて自分の考えと照らし合わせながら意見を述べるができる。常に発展的な思考ができる子である。

歴史ってどう思うについて

略 歴史は本を読むとわかるのでいろんな情報が入ってきていいと思う。今これからはいっぱい読むので、図書の時間を減らさないで（4月15日）

歴史が好きで授業中も本から得た知識を披露することが多い。農民というのは弱者であるや支配者は悪いという一面的にとらえやすい考えが目立った。本で得

た知識が全てと一面的な捉え方になっているのも気になった。多くの人と関わったり、日本を支えてきた人たちに思いを馳せたりすることで、様々な立場の人の思いに気付くであろう。また、いろんな友達のよさを見つめ、受け入れ、協力していくことが大切であると気付くよう支援していきたい。そして、洋介の気付きや発信をとおして、多くの子どもたちの心を揺さぶることができればいいと願っている。

② 蒼汰

多面的に考える力をもっている子どもである。気持ちが優しくクラスのみんなから信頼されている。アンケートでは「社会科は好きではない。覚えるばかりで黒板を写す授業」と答えていた。どの教科でも、より多くの子を納得させる発言をしたいと思う気持ちが強い。

蒼汰が話すともみんなが納得してしまい、疑問をもったり、深めたりする前に話し合いが進む。しかしまだまだ考えが固く発展的な思考ができないことも多い。

歴史って面白い

略～社会科って違うんだなって思いました。まだ、原始人の劇化や縄文・弥生のことをしているけど、社会ってこんなふうな勉強なのかと思うと、一番好きな教科になりました。(4月15日)

社会科が始まってすぐに「社会科が好き、歴史が好き」というふうに変わってきた。それとともに意見と意見を関連させたり、統合したりする姿が見られる。

③ あい

リーダー的存在で、どの課題についても意欲的に取り組む。常に自分の考えを表に出して、内容にかかわろうとしている。社会科が大好きな子である。

略～歴史のことはあまり知らないことが多いです。

毎日自学をしていると、朝の会で出てきた言葉がどんどんわかっていく。それを発表すると、また、新しいわからないことが出てくる。いろんな時代をやってカフェで劇をしてみんなにさすが6Cと思ってもらえるようにしたいです。(4月15日)

いろいろな立場や思いに気付き多面的思考力があるが、考えが固く発展的な思考が苦手である。しかし、多様な視点で調べてきて、多くの資料を根拠にして考えることが増えてきた。また、そういったものを子どもも学芸員や劇、また、他の教科にもつなげて考えていくことができるようになってきた。それを繰り返す中で、発展的な思考力が育ってきた。あいの気付きや発信、また、多面的・発展的な思考をとおして、多くの子どもたちの思考力の広がりにつながればいいと願っている。

④ 凌

アイデアはあるのだが、言葉や文にすることが苦手なで、自信をもって発言することが少ない。大変自己肯定感の低い子どもである。

今までの社会が嫌いだったけど、歴史はちょっと違う感じがする。でも、劇化はみんなにちゃんとしてって言われるからちょっといや。僕は社会科に何にも興味ない。やっぱり、社会は難しい。

着目児にしたのは、社会科が好きではないとアンケートに書いたことと、生き物以外は何の興味もないと公言していることからである。しかし、子どもらしい気付きのできる子どもである。さらに凌のよさに気付く子どもが増え、これを機にクラス全体に、進んで友達のよさを認めていく雰囲気うまれるようになってほしい。

本単元をとおして、少しでも自分に自信をもって取り組んでいけるようになることを切に願っている。

2. 研究方法

2. 1. 歴史と公民をつなぐ

小学校の歴史学習は、通史学習になっていることが多く、社会認識形成に終始しており、子どもが主体的に歴史学習で学んだことを活用している実践や、意思決定し自分ならどう行動するのかを考える実践などを行うことは難しいと言われている。しかし、子どもたちのおかれている身近な現在の生活に歴史をつないで考えることは大切なことである。つまり、歴史教育をとおして、民主主義社会で生きていくための公民的資質を養うために、社会について分かり考える力が必要であり、社会科はその力を育てていかなければいけない。

ゆえに、一方的な通史学習や社会認識のみにこだわるのではなく、歴史を子どもたちの生活とつないでいくことが教師の役目であると考えます。

現在社会は価値観が多様化しているため、自分の考えを表現し、立場や考え方の違う仲間と問題解決し、新たな考えをつくる姿が求められている。そのためには問題解決学習のような一人一人が問題を見付け、これまでの生活体験や学習、知識・技能を活用して、追究し続けていく。そのプロセスの中で、新たな視点や社会認識を獲得したり、深めたりしていく学習が基盤となるのだ。この学びが、歴史と公民の学びをつなぐことであり、公民的資質を養い、未来の生きて働く力となる。

本研究の歴史単元においても、公民単元のそれぞれの政策を選択する政党の姿をイメージできるように、歴史上の人物でも「選挙」をすることで意思決定していく。そして歴史単元と公民単元の学びをつなぐために、複数の単元に「選挙」「選択する」というキーワードを設定して1年間の学びをデザインしていく。歴史

単元では北条時宗の二度にわたる元寇という国難を乗り切った時宗の意思決定場面を子どもたちと考えてみたい。他でも、歴史的事象の価値判断、政策の意思決定場面を多く取り入れる。歴史と公民を問題解決学習でつなげることで、より身近な問題を扱う公民で質の高い価値判断をすることができる。学びをつないでいくことで、自分とのつながりを実感し、将来は自分たちが創造するという意識をもち、公民的資質の基礎を養っていくことになると考えている。

2. 2. 授業分析

本研究は、社会科の問題解決学習を基礎とした授業づくりである。小学校社会科問題解決学習の授業分析として多くの蓄積がある社会科初志の会の授業分析の方法を採用する。筆者もこの授業分析を用いて授業の研究を進めてきた。また、初志の会の特質として、子どもが主体となって追究していく授業デザインがあるため、子どもによる授業分析と再生刺激法(ビデオの振り返りの後、意見や思いの詳細を文節ごとにアンケートをとる)を組み合わせて採用していきたい。

今回の授業は問題解決学習の「話し合い」を中心にした授業である。子どもたちは話し合いの中で友達の考えを受容的に受け入れ統合させる。そして自分の考えを修正したり深化させたりしていく。

これまでも「子どもによる授業分析」を行い検証してきた。子どもたちは、無意識で行っていた授業に対し、別の視点からも授業に臨み、当事者意識をもって自分なりに分析するようになった。このような成果はまさに社会科で求められている公民的資質のもととなる基礎である。これからの時代を生きる子どもたちを育てていくためにも「子どもによる授業分析」を大切に実践・分析していきたい。

本研究では公民単元を中心に検証していく。

3. 授業実践

3. 1. 着目児にとって歴史単元の意味

単元の流れは下記である。

- 第1時 鎌倉時代の「みんなの問題」をつくらう！
- 第2時 武士の館探検レポートを書こう！
- 第3時 源平の戦い、源氏平氏について調べよう。
- 第4時 鎌倉幕府について調べよう！
- 第5・6時 源頼朝の亡き後、幕府と御家人はどのようになっているんだろう。
- 第7・8時 元寇について調べよう。
- 第9時 学習課題についてひとり学習をしよう。
- 第10時 参謀として時宗にアドバイスをしよう

単元をとおして、子どもたちは、学芸員さんや文化体験のゲストティーチャーなど、地域や人とともに学びを深め、地域交流の場にも参加していただいた。多くの方と交流を繰り返すことにより、地域の歴史を身近に感じ、

地域に誇りをもつ子どもも出てきた。

では、4人にとって本単元の意味はどうであったのだろうか。変容についてはそれぞれの違いがある。4人の着目児の中でも大きく変容が見られたのは洋介である。第2時、やりたくないと言っていた武士の館レポートについても「グループでインタビューをしたら、「田楽」の人の気持ちも考えていうことができたので、いろいろな人の気持ちがわかってよかった。考えてみるのとやってみるのとは違うことがわかった」と振り返っていたことから、仲間と話し合うことが学びの深まりにつながるということがわかったようである。その後の学習でも、当事者となって考えることはもちろん、多様な立場の視点をもって取り組む姿が見られた。洋介にとっては、仲間との対話によっていろいろな見方や考え方ができるようになり始めた単元であった。

もう一つの大きな変容は第9時のひとり学習である。九州の元寇資料館や歴史民俗資料館に電話をし、振り返りでは「調べ学習って、歴史になっても人に聞くのがいいってわかった。楽しくなって、副校長先生にもインタビューした。写真と資料がいっぱいになった」と書いている。直接行動したことで、他が知らない話を得られ、満足感がうまれたのである。今までの洋介の意見は、本から得た知識を話すため「難しい」と言われていた。しかし、わかりやすさを意識し、提示の仕方を試行錯誤する洋介に大きな成長を感じた。2学期の洋介の様子をみても大きな変容の場面であった。しかし、変容があったとはいえ、まだまだ、興味関心や思考過程にムラがあることに課題を感じた。

蒼汰は、時代を越えて考えたり、単元の終末を意識したりと発展的な思考が見られるようになった。また、第5時の頼朝についての話し合いのあとでは「周りの意見や考えを聞くことによって、自分の意見をもっと深めることができるということがわかってきました。6年生になるまでは、話し合いは答えを出すことだと思っていけど、自分の考えが深まることだということがあったことは、ぼくが6Cになって学んだ大きなことです。」と書いている。仲間と学びを創りだすことを楽しんでいることが伝わってきた。また、本単元から常に単元のゴールを考えた視点をもつようになった。しかし、まだ、調べ学習や考えを出していくときに固さを感じる。

あいはい自分の考えだけでなくその考えに至るまでの思いを伝えることが多くあった。それを受け、同じように意欲的に取り組む子どもたちの姿が見られた。また、あいの学びに向かう姿に触れ、多様な方法で調べ学習をし、自分の考えを構築していく子どもも増えた。しかし「あいちゃんだからできるんだね」という言葉も聞かれ、もう少し全体に資料の提供や支援の必要があると感じた。

凌は「歴史の勉強って面白いよ」とこっそりゲストティーチャーに語ったり、校外学習で「歴史好きな人？」

と聞かれ挙手したりする姿も見られた。単元の終末の歴史の劇では、凌の頑張りや変化を周りの子どもが認めていく場面が増えることで楽しんで取り組んでいた。保護者の手紙には「大きな声で頑張る姿を見ていて、私も泣いてしまいました。今まで、凌のことで、ちゃんとしなくて心配で泣くことはあっても感動して泣くことはありませんでした。みんなに会えた凌は最高の6年生になると思います。」と書かれていた。単元を見通した計画を立て実践することにより、凌自身も大きな学びになった。最後の劇では変容が見られたが、作文やアンケートなどではあまり変容は見られなかった。自己肯定感が低く、どんなことに対してもいい評価をすることはなく、やはり凌にとって、社会科は好きになれない教科であった。

今回、プロジェクト型学習をすることで、どの子ども意識して、見通しをもって学ぶことができた。しかし、授業中のあいや蒼汰のゴールを意識した多くの発言では、社会参画することが最後の目的となっているように見られた。決められた社会参画の活動自体が学びのプロセスをいい意味でも悪い意味でも一方向に偏らせることとなったことも否めない。今後はもっと複線の重層的な計画を立てていけるようにしたい。そして、子ども学芸員をするときも、大学の先生や専門家にも来てもらうことで社会認識を深め、歴史の内容についても深く追究していける子どもを育てていきたい。

3. 2. 公民単元の内容

本単元は、学習指導要領では以下の内容となる。

第6学年の目標(2) 日常生活における政治の働きと我が国の政治の考え方及び我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにし、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できるようにする。内容(2)ア 国民生活には地方公共団体や国の政治の働きが反映していること。

これを受けて本単元では、政治は国民生活の安定と向上を図るために大切な働きをしていることについて考える。その手掛かりとして、国民生活には地方公共団体や国の政治の働きが反映していることを調べるようにする。その際「地域の開発」の事例として位置づける。

3. 1. 2. 単元の目標

- ・地方公共団体の働きや議会・行政・国の支援・住民の関係や政治の役割、政策決定のプロセスについて、調査したり資料を活用したりして調べ、政治の働きを理解する。(社会認識)
- ・他者の意見等とおして、政策についての自らの考えをもち、判断を行うことができる。(公正な判断力)
- ・一人一人が主権者としての自覚をもち、進んでまちづくりに参加しようとする態度を身に付けることが

できる。(社会とかかわる力)

3. 1. 2. 単元の流れ及び着目児の変容過程

第1時 18歳選挙権について

和歌山大学の学生で『和歌山の10代投票率を日本一にしようプロジェクト』代表のOさんを招いた。「人の出会いで変わった」という話をどの子どもも真剣に聞いていた。多感な時期に、一生懸命頑張っている人の生き方に触れることは大きな学びになる。あいは「大学でそんな活動ができるといいな」とOさんの生き方に興味をもったようだった。

第2時 県議会へ行こう!

子どもたちは、本議会場に入った瞬間、独特の静かな雰囲気緊張感をもち圧倒されていた。質問の内容も難しく子どもたちには理解しにくかったようであった。そこで、次時での学習に向け、願いが政治的に実現するまでの流れを予想して図に表すとともに、今後の学習の計画を立てた。公民的な見方・考え方を高めていく上でも、資料や図表を的確に読み取り、公正な判断力を身に付けさせることが重要であると考え、もう一度、資料集や教科書をもとに話し合った。

洋介は、興味をもって聞いていたが、難しい言葉も多く共有化は図れなかったことから、後日、再度全員で話し合いたいと言った。今までなら、自分がわかると満足してしまうが、クラス全体で話し合っ共有化しようとする洋介に成長を感じた。また、それだけではなく、洋介にとってはみんなで分かち合いたい興味のある問題であったのだろう。

第3時 県庁企画総務課の方に教えてもらおう!

県庁の企画総務課の方からの単元のゴールにもなる「6C長期総合計画を作してほしい」という話は、多くの子どもにとって、単元のイメージが明確化し、追究意欲につながった。また、洋介やあいの「自分たちが頑張ることで何か和歌山が変わるんじゃないか」という考えは、3年生の防災の学習の社会参画を意識した授業デザインで取り組んできたことから身に付いた学びである。蒼汰は、前回の歴史単元から発展的思考に変容がみられるようになった。洋介のように自由な発想を構築していくことは苦手だが、出会った人の言葉を自分の意見として取り入れるのが得意である

第4時 高齢者の福祉はどのように行われているか

凌は社会科の中でも調べ学習が嫌いである。前単元より『家庭での調べ学習が保障されていない分、一緒に本を探したり、タブレット端末を自由に使わせたりし、共に整理し自信をもって発言できるように場を設定する細かい支援が必要』という具体的な支援の方向性が見えていた。タブレット端末で調べた介護士の不足についてグループ学習で話すよう声をかけた。難しい問題であるが、全体学習の場でも「平均年収」「離職率」について触れ「次は施設の建設費用について調べたい」と意欲的な発言があった。

子どもたちは今までの学びのプロセスの中で、グループ学習からそれぞれの考えを伝え合い、学びを深める力がついてきた。また、グループの問題をさらに次時の問題やクラスの問題として挙げる子どもも多く、凌の成長だけでなく、学びのコミュニティとしてクラスの成長を感じた瞬間であった。

第5時 税金の使い道

洋介にとって、本単元は歴史以上に人とのかかわりが大きな契機になると感じ、単元構成を再度検討することにした。蒼汰をはじめ、多くの子どもが「和歌山のよさをPRしたい」と感じている。しかし、和歌山のよさが何かということについて差異がある。そこで和歌山のよさと課題について話し合った。あいには1学期同様、前時の問題をまずは自分の身の回りから調べ、伝わりやすさを意識して発言する姿が見られた。「近所の高齢者にも聞き取りをした」と話しているあいに対し「あいちゃんみたいな調べ学習をしたい」と言う子どもも増えてきた。

凌は第4時の調べ学習で友達から認めてもらったことがうれしかったのか、家庭で高齢者施設の建設費用について調べていた。また、出産費用や子育てにお金がかかるという話から、実際に母親に聞き、朝の会で伝えていた。そういった繰り返しの中で、さらに意欲的に取り組む姿が見られるようになってきた。

第6時 農林水産総務課の方に取り組みを聞こう

凌をはじめ、本学級は生き物が好きな子どもが多く、4月初旬は、社会科が嫌い、理科が好きという子どもも多く見られた。6年になり社会科を進めていく中でだんだんと社会科が好きになる子どもも増えてきた。そこで、世界農業遺産みなべ・田辺梅システムの「生物の多様性」の観点から凌たちがどうとらえ、社会科についてどう学んでいくかを見ていきたいと思い、県庁農林水産総務課の方に来ていただいた。

第7時 県議会へハテナを聞きに行こう！

議会事務局の方からは「しっかり勉強して今度はあなたたちがこの議会の場に本当に座ってください。そして未来の和歌山を大きく変えてください。」という言葉ももらった。その言葉に大きくうなずき、自分たちの6C議会へ思いを馳せていた。

総合的な学習 財務省「財務教育プログラム」

財務省の教育事業「財務教育プログラム」による特別授業が行われた。子どもたちの関心のある分野のグループに分かれ、タブレット端末を用いた財政シミュレーションゲームで国の財政課題に取り組んだ。特にグループ学習では活発な意見交換があり、県の政策を考えていく上で大きな学びがあった。全ての予算を増やすわけにはいかないこと、将来の税収のために新産業に予算を計上したいこと、高齢化のための対策の提案など、参観者も驚くほどの発展的な思考のもと、発言することができた。多くの子どもが増税に賛成中、あいには「消費税を増税すると消費欲が減り、結局不景

気になってしまうから消費税増税を簡単に考えるのはいかがか」と問いかけた。あいの発言にあるように子どもたちは税金について一面的な見方になっているように感じた。

子どもたちの社会参画力を育むには、自分と社会とはつながっており、自分も社会の一員であるという考えのもと、社会的事象を自分事として捉えることである。子どもたちの様子を見てみると、本当に自分事として捉えているかについては疑問が残った。

第8時 ぼくたちのまちづくりを考えよう！

「和歌山県の次世代政策」（県の広報誌）をもとに県の課題や将来について話し合った。子どもたちは、県が抱える高齢化、人口減少などに大きく関心を示していた。その後、県の5つの基本目標をもとに、グループでまちづくりについて話し合い、党の名前とキャッチフレーズを作った。県民の願い、県議会、行政の仕事などに気付くことができるように、根拠を明らかにしたワークシートを用意し、事実の羅列にとどまらず、関係性を考えた。地域学習には、それぞれの社会事象の関連付けや、社会認識を大きく変化させるような様々な意義がある。特に、和歌山県の将来について考える学習は、地域の明日を担う主権者として、将来を考えることにより、地域を愛する個を育てるという地域学習の大きな意義をも含んでいる。

第9時 グループの問題についてひとり学習をしよう

歴史の授業では、洋介やあいの調べ学習の変容から少しずつクラス全体に変容がみられるようになってきた。本単元では、学習内容を効果的に理解させるために、身近な和歌山県の県議会を見学することから、興味関心を喚起し「和歌山県の課題や将来」を取り上げた。そして、住民や県庁への聞き取り、学び合いをとおして、地域住民の願いを実現していく知識や方法を学んできた。

調べ学習を続けていく中で、子どもたちは県庁、地域の人たちの願いや工夫、行政の役割など、多くのことを学び、そこから出てきた課題の解決をとおして、多面的に和歌山県の姿をとらえ、自分なりの考えをもてるようになってきた。

第10時 6C議会を開こう！（防災党）

第11時 6C議会を開こう！（福祉党）

追究過程で教育内容と教育方法に位置づく「教材」、それらの認識をとおしてどのような意味を見出すかという「教育内容」を明確にしていくことが必要である。

本単元では社会認識も大切に進めてきたつもりであったが、問題の設定に弱さを感じた。次時からは、教師からの語句や意味などの整理の必要性を感じた。

蒼汰は、本単元に入ってから「まちづくり」について興味をもち和歌山の課題をもとに「北部と南部を結ぶ交通の不便さ、紀北に人口が偏り、観光が紀南にかたよってバランスが悪いから、中部を発展させることでまちづくりの政策が南北をつなぐ役割をする。」とい

う考えを話している。意図はよくわかるのだが、クラス全体で共有するには内容が難しいと感じた。

第12時 問題についてひとり学習をしよう

「みなべ・田辺梅システムにジアスツーリズム（グリーンツーリズム・修学旅行）を取り入れ、新しい観光名所にしよう」という紀州観光党から出た問題についてひとり学習をすることになった。

和歌山県の課題や調べ学習、多くの人との聞き取りから、現実的に難しいのではないかと思っている。ただ、これからも梅システムが発展してほしいという願いから何か違う形で発信することはできないか考えている。蒼汰は、前時のまちづくりの提案から、それぞれの分野を統合させて考えていくといいという思いをもっている。その気付きをみんなにわかりやすく伝えることを期待していた。

あいには未来にどうつながっていくか、6Cの長期総合計画をこれからどのようにして作っていけばいいかと考えている。クラス全体としては、まだまだイメージがしにくい、立ち止まるポイントになればいいと考えている。あいの考えにふれることで、子どもの言葉でつくる授業に近づくのではないだろうか。

3. 1. 3. 着目児にとっての公民単元の意味

単元を終え、また、各政党の発表の場「ちいきっずカフェ」で地域住民に発信して投票して意見をもらった。また、それらの意見を取り入れ、全校集会でも立会演説会を行い全校児童が投票する場を作った。

最終的に一人一人が長期総合計画を作成し、グループの意見、クラスで決まった意見をまとめて「提案書」として和歌山県庁に提出した。

クラス全体の子どもたちが、政党としての意見や各自の考えを理解したり、疑問に思ったりしたことを話し合うことで、自分の目線で「望ましい和歌山県の姿」を考えることができた。そして、自分は県民の一人であると共に、まちづくりの主役であるという認識もった。ひとり学習での成果が、多くの子の具体的な数字や政策を例に出す根拠ある考えへとつながった。

洋介は和歌山と日本を関連させ意見を言っていた。複数の社会的事象を関連付けていく力が育ったと感じた。多面的・発展的な思考力、資料分析能力の高さがクラスに大きく広がっていったことを考えると、洋介の存在は大きかった。

洋介の契機になったのは、議会事務局の方の2つの言葉である。「今度は君たちがこの議会の場に本当に座ってください。未来の和歌山を大きく変えてください。」という言葉に本気になり追究意欲が高まった。それだけに、「県予算で新産業に充てられている予算が少ないのはどうしてか」という質問をしたとき、詳しい説明がなく「それぞれの働いている部署のことだけが詳しいのはなぜだろう」ということが疑問として残った。その疑問が単元をとおして洋介の問題意識の醸成につながった。年賀状に「6Cの一番の思い出は社会の話し

し合いです。なぜかという資料やインタビューや本の知識を根拠にして、みんなに説得したり、伝えたりするときがすごく楽しいし、伝わらなかったら悔しいし、他の子が、僕の知らない資料や本の知識を根拠にして話されたらすごく焦って、何か知りたくなるからです。6Cでよかった。こんな授業ができていたから」と書いていた。

蒼汰は、学びを一つずつ確かなものにするため、県庁の多くの課へ何度も訪ね確認していった結果が思考力を高めることになった。県庁、地域の人たちの願いや工夫、行政の役割などを学び、そこから出てきた問題の解決をとおして、多面的・発展的に和歌山県の姿をとらえ、考えを構築していった。特に中紀のまちづくりにおいて、和歌山の南北格差の課題をもとにしたまちづくりまちづくりがつなぐ役割についての考えは発展的な思考の高まりを感じた。転勤による引っ越しの多い蒼汰にとっては、今後和歌山だけでなく、違った地域に移住しても地域を見る視点をもつことができたのではないだろうか。

あいにとって、多面的・発展的思考力、追究意欲、ともに低い子どもたちとのグループ活動は単元の終末に向かっている中で悩みの種になった。何度も苦情を訴えにくる姿が印象的であった。しかし、追究を重ねる中で考えを深めることのよさや自分事になるあいのよさをグループの子どもに肌で感じてほしいと思い、積極的な支援をしないで様子を見ていた。グループで立会演説会の練習をしているところを和歌山大学の二宮先生が参観に来られた。あいのグループが各分野に関連性をもたせる思考について評価をいただいた。そのことをあいにも伝えたところ、大学の先生の評価というところも大きかったようで変容の大きな契機となった。

凌は、「生物の多様性」の視点で学んだことは追究意欲の持続にとって大変有効であった。そして、考えを受け止めてくれることに安心して、安定して学びに向かっていた。振り返りも内容、量ともに増えていった。

今まで消費税にいちゃもんをつけてきたけど、税金も少しは必要で、そのお金で道路とかいろいろとやってくれていたとわかった。一番驚いたのは医療費も減らしてしてくれたことが驚きました。今まで中国の汚染や北朝鮮などが悪いと思っていたけれど、日本も同じようなことをしているし、何でも勉強しなくてはわからないんだと社会科を勉強して思いました。（凌）

自己評価も低く、好きという言葉は一切出さない凌であるが、その表情は明るく「凌は変わった」「そうじや練習を頑張るようになった」と評価されることも増えていった。それに伴って、友達のトラブルが激減するようになった。凌にとって特に本単元は成長する

ために大きな意味があった。

本単元をとおして、着目児を中心にさらにクラス全体に対話的な学びを作ることができた。しかし、学習が深まれば深まるほど、子どもらしい意見が出しにくい雰囲気になったグループもあった。教師が一人一人の学びの何を支援・評価しなければならないかをもう少し明確にし、本授業の修正に取り組んでいきたい。

学習が終わった今でも、子どもたちの和歌山の未来に対する思いは強く、総合的な学習として、その学習を継続している。社会科の学習で学んだことを生かして、地道に、地域を愛する輪を広げ、続け、深めていくことができればと考えている。

4. 考察

4. 1. 授業分析（発言からみえる着目児）

以下の分節分け、及び分析は筆者による。詳細は略

第1分節 本時の問題と提案

第2分節 梅システムの伝統 世界農業遺産のよさ

第3分節 梅システムの地域性、抱える問題

第4分節 ニューツーリズムの価値

第5分節 6Cらしい長期総合計画とは？

第6分節 グループ学習

第7分節 コラボや中紀まちづくり

4. 1. 1. 発言からみえる着目児

子どもたちは自分の意見を丁寧に申し合い、内容をつなげていた。県の将来に対していろんな角度から考え、県庁で働く方、ゲストティーチャー、インターネット、保護者の方、地域のお年寄りなどから得た断片的な知識を概念的・統括的な知識に高めるための練り合いの場になった。そして、住民の和歌山県に対する期待や、地方公共団体の仕組みや役割について気付き、自分の目線で「望ましい和歌山県の姿」を考えることができた。また、自分は県民の一人であると共に、まちづくりの主演であるという認識をもち、進んで地域にアプローチができる社会人として成長していくためのきっかけになったのではないだろうか。

全般的に見て本授業は子ども相互の応答や議論は多くみられた。最初の段階から、まちづくり、コラボ、予算といった言葉が現われている。しかしそのことについて様々な検討がなされることはなく、発言が流れていった。教師は子どもの発言内容に丁寧に対応して、予算や観光地としての課題について深く追究させていく場面も必要であった。しかし、第4・5分節では新しい視点の意見が次々と出され、考えが深まり、中紀のまちづくりや6Cらしさ、未来へつなぐということについてどんな意義があるのか追究していた。

また、5つの基本目標に関わる多くの言葉が出て、多面的な追究がなされ、まちづくりにつながる過程が明らかになっていた。

あいは、2分節の蒼汰、洋介の考えにもどり「紀北と紀南をつなぐ中紀のまちづくりがいい。さっき発言したうたちゃんの5つの目標につながるんだけど、一番の安定した雇用を創出するっていうのは、(1)仕事を増やすことで、本当の意味で移住の仕事になり、人が増える。観光だけだと観光関係の人にはお金が入るだけで、世界農業遺産とそれにかかわる産業に力を入れることで、本来の和歌山県の課題の「税金」が増える。～略～5の時代に合ったっていうのは、さっきから言っているコラボすることでまさしく時代に合った6次産業になるからいいと思う」と話した。(1)では多くの子どもたちの考えである「単に仕事を増やす」ということだけでなく、税金のために「和歌山県の仕事」を増やすことも提案している。

そこで、洋介が「県庁とか日本とかどこでも、(板書する)ここが新産業の予算、ここが観光の予算、防災って分かれてるやん？実際県庁だったらそれぞれが課も違うから、観光だったら観光の予算だけを考えているやん？わかる？でも僕らは、この全体的に(中紀まちづくりの案を指さし)考えることができるわけやん？それが6Cらしい長期総合計画やと思う」と県の予算の決め方と自分達の予算を考えとは違うと話した。

あいも洋介の発言をうけ「各党それぞれの予算を考えるのではなく、それぞれ同じように目を向けることがすごく大事だと思った。これから6C長期総合計画を作っていくときに6Cらしいこの考えをまぜて考えていきたい」と書いている。洋介の発言は授業の中では早口で伝わりにくかったが、「子どもによる授業分析」で振り返ることをとおして、洋介の言いたいことを学び直しができた子どもも多かった。

また、その後、蒼汰が続けて「今6Cが考えていることは6Cの各党で協力してあの5つの目標を達成することが大事。洋介が言ったように各課で分かれてやっているから県庁でもまだ考えていない。ぼくらは各党全てに目を向けて話し合ってきたから、それを未来へつなげることが6Cらしい長期総合計画になる。このことをみんなで話し合ったらどうかなって思うんだけど」とグループ学習することを提案したのである。

洋介は、2単元をとおして発展的な考えだけでなく、多面的な思考に変容が見られた。そして、常に両極をみて第三者的に位置付けするようになった。

本授業でも5つの基本目標に立ち返り、7分節の発言では、県、国ではそれぞれの部署に特化して予算を考えるが、自分たちの提案の特徴はそれぞれの分野を全員が学び、予算を考えることができているという違いに気づいた。この気づきは他の子どもに伝わり、仲間の考えを揺さぶることができたのである。

7分節最後の発言でも「防災と観光のコラボっていうんでなく、福祉がなかったら少子化を食い止められないし、新産業なかったら新しい雇用はできないから、どれもなくすことなく、全部をコラボしなければ本当

の意味で6Cの言うまちづくりにならない」と発言し、授業分析の際も多くの子どもが「その時は分からなかったが、今聞いてみるとよくわかる」と答えている。

蒼汰は、発展的な思考に変容があった。本単元ではみんなの意見をどのようにまとめて新しい考えにしているかということを考えていた。問題で位置付けた「賛成」「反対」でとどまることなく、2つを統合して自分の考えを出している。しかし、教師として蒼汰の意見の整理や付け加えが必要であった。

あい、うたと仲良く、2人で「5つの基本目標」について、話し合っていたようである。前回の授業に比べ、発言の時は自分なりに整理し、伝えたいことを絞って話すことで自分の意見をわかりやすくしようと心がけていた。1学期は教師の意図を汲み、行動するあいになったが、教師のイメージする発言よりもうたや蒼汰、洋介などの意見をうけとめ「防災党」としてどうするかということを考えるようになった。

凌は、今回も何も話さなかった。「やっぱり自信ないし、いつ言ったらいいかわからない」と話した。全体学習の場では発言はなかったが、グループ学習では積極的に「人が来ていい観光地と人が来ないからいい観光地があると思う」と話していた。次時の話し合いで凌の意見について考えた。凌は屋久島のことを例に出し、みんなに堂々と話していた。

まだまだ、ムラもあり社会科が好きという言葉聞くことはないが、大好きな生き物を介して社会科で考えることの楽しさを感じたようであった。

4. 1. 2. 2つの授業から

2つの授業分析から、どちらも対立する考えがあったが、子どもたちは対立点だけでなく、相互関係を見出していた。これは、まさに社会的事象を一方ではなく、多面的な視点から見ていることと言えよう。

着目児の変容からさらに多くの子どもが、社会的事象を比較したり、複数の社会的事象を結び付けて、関係を見出したりするなど、複数の側面から社会的事象を見ることができるようになった。

一方、洋介や蒼汰のように複数の社会的事象を結び付ける思考は、社会的事象を比較し再構成する活動を繰り返すことをとおして、複数の側面から社会的事象を見る力が育成されたものと思われる。

またその両極をみて第三者的に位置づける発展的な思考が洋介・蒼汰・あいなど着目児を中心に生まれ、全体へと広がっていった。

また、今回「子どもによる授業分析」を取り入れたことは、子どもたちにとって新しい視点がうまれた。「もう一度見てみると、その時とは違う意見がでてきた」「賛成していたのに反対意見になった」など、授業記録を検討することで授業のときと現在とでは「意見が違う」ことになることを認識していた。

つまり、時間の経過によって喪失される授業の記憶を留め、授業の過程では認識することのできなかつた

授業の内容を確認した。2カ月前の自分が仲間と対話している場面と出会い直すことによって、自分自身で再学習するという効果があった。

また、授業記録を検討することで仲間の姿を認識する契機にもなった。子どもたちはメタ認知的、俯瞰的な視点をもつことが考えを深めていくことにつながるということがわかり、授業の当事者とは違った視点から授業の事実を捉えることができ、メタ的に授業に対する当事者性も育ってきたと感じている。そして、今後も「子どもによる授業分析」を繰り返すことで、子ども自身もメタ認知力が高まり、より効果的な分析が行われると考える。

5. 成果と課題

4の考察でも述べたように、着目児の姿をとおして、2つの単元「社会参画をめざした問題解決学習の授業」を実現することによって、多面的・発展的思考力が育っていく姿が検証できた。また、もう一つめあてでもあった社会科好きの子を育てる授業づくりにもつながった。

そこで、この授業づくりから以下3点の成果と課題について明らかにしていきたい。

5. 1. 1. 本授業における「問題」

子ども自らが生み出した問題と社会認識の関係については協議会等でも指摘があり、本研究の今後の課題となった。材と子どもの生活との接点や関連を考えることが重要であるとすると、リアルな活動をとおして、子どもが社会事情や働く人々に共感をもち、思いや願いをもつようになると考えられる。そのことによって、子どもの生活経験との密接なつながりの中で熟成されていく関心や願いや必要感によって構成される切実な問題となりえるのである。

しかし、子どもの身近な問題や子どもの関心・願いだけにこだわると、小さな問題となりすぎ、教科内容が全て網羅できるのか疑問である。教材に内在する問題については、子どもの追究に任せることなく、教師は見通しをもっていなければならない。子どもの問いを、社会認識に迫る質の高い問題まで高める手立てが不十分であった。

歴史単元では、どのようにすれば子ども自ら問題を発見していくのかという指導法的な視点を重視しすぎ、子どもがどのように問題を発見し、問い続け発展させているのかという子どもの学びに焦点をあてて省察する必要があった。単元の始めの段階であいが出した問題を「単元を貫く問題」としたが、初めは問題として不十分なものであった。しかし、子どもたちに問い続けることによって問題を微調整しながら、進めていくことができたのである。その解決をとおして、認識をもとに新たな問題状況に出会い、さらに質の高い問題へ変容していった。そういった問題に対する認識のずれとその発展は洋介が葛藤する学びの姿から明ら

かになった。

公民単元は、問題が身近な問題のため、興味関心は高く、全般をとおして子どもたちは熱心に学習した。

代表の授業の「問題」ではみなべ・田辺梅システムという一部の観光地のことを話し合うことは問題としては小さすぎるという意見もいただいた。しかし、代表の授業は一つの単元のモデルであり、その中で扱っている一授業の問題である。子どもたちにA・Bという立場に分かれた話し合いを位置付けたことにより、子どもたちからはAとBはつながっている、本当にこんな分かれ方にしているのなど、疑いをもち本質的な部分に迫る場面がみられた。

問題解決学習は、教え込みではなく、あくまでも学習の主体である子どもがもっている疑問などの問題点を大事にし、解決していく学習である。一つの問題を解決している中で疑いはじめ、両極をみて第三者的に位置付ける子どもが出てきてクラス全体に影響を与えたことは、ねらいである多面的・発展的思考につながった。教師が教材に内在する問題を構造化し、見通しをもっていけば、1時間の中で見えなくても、子どもたちの追究は高まり、発展していくことがわかった。

しかし、問題によって子どもが習得する知識も変わってくる。問題の違いが、習得される知識の違いを生み出すことは間違いないことである。またさらに問題を変容・発展させるには、問いを醸成させるための立ち止まりが必要であることが明らかになった。

5. 1. 2. プロジェクト型学習の価値

地域教材として、カフェ（劇化・立会演説会）と子ども学芸員で学んだことを地域の人に発信した。

劇化では子どもたちは証拠を探してより正確な歴史観を導き出していった。指導者、農民、貴族など、多様な立場から台詞をつくり、主体的に社会認識を高めていた。授業中だけに認識を定着させることでなく、子どもが歴史上の人物の立場になって対話やインタビューしていくことにより、それぞれの文脈でストーリーを主体的につくっていった。歴史学習でお世話になった博物館、市役所、大学、NPO、神社の方々などそれぞれの教材に関わる方々を招いて校外で劇をした。

また、隣接した博物館で「子ども学芸員」をして地域の人に「日本の歴史と和歌山のかかわり」について発信した。子ども学芸員として、アウトプットする際、学んだ歴史観を自分事として語ることは、どれだけ多面的な視点で物を語れるかということにつながる。そして、歴史の面白みや深みをどれだけ語れるか、未解明な部分については発展的な思考も必要となる。また、地域の方に歴史の楽しさを語るには相手を本気にさせる社会科好きの部分が必要である。本研究のねらいでもある3点をクリアできるのが子ども学芸員のよさだろう。ただそれは、劇や子ども学芸員をすることがゴールということだけでなく、教えてもらったことを表現し、評価してもらうことで協働した学びが生まれ、

ねらいにつながったのである。

公民単元では和歌山県の課題を取り上げた。地域社会の課題を把握、分析し、その課題の解決策に対して自律的に意思決定をしていくためには、さまざまな学問的な知識・技能の習得が必要となる。その知識・技能を実際に活用する場面が子どもによる「提案・参加」の場面である。つまり、解決すべき問題が決まったら、プロジェクト型の学習をデザインすることが大切であることがわかった。プロジェクトのグループの中でその子どもの順番が生まれ、そのよさが輝いていく。自分が仲間とどんな世界を作っていくかということによって自己実現できる。仲間と共にプロジェクト型の学習をし、汗や涙を流して作っていくことが、それぞれの居場所につながる。その繰り返しはグループの自治性になっていく。また、グループで完結しないほかのグループとのかかわりの中で学級風土が生まれ、子どもが自分でチャレンジして受け止めてもらえるだけでなくリスペクトしあえることで真の自尊心が形成されて自己実現していくのである。

それは、授業中だけで社会認識を定着させることだけでなく、子どもが「使命感」をもって対話やインタビューしたり、生活につなげて考えたりしたこと、子どもそれぞれの文脈でストーリーを主体的につくっていったのである。子どもたちは地域の問題をより多面的、発展的に理解することができ、一つの立場にだけでない見方や統括した見方をすることができることが明らかになった。

自分たちの住んでいる地域とのつながりが比較的薄い子どもたちにとって、身近な人々とかかわり合う力を身につけることは、将来的にも必要なことである。子どもたちが自分たちの地域社会の中で主体的に社会に参画できる力を育成するためにも、社会や社会事象に関わって「協働」で学び合うことが必要である。

本研究では、常に「和歌山」と関連させながら進めていった。しかし、地域教材すべてが身近というのではなく、身近であるから理解しやすいというわけではない。また、社会と関わるのが第一となり、社会科としての子どもの学びが不十分になりはしないだろうかと感じている。子どもたちがかわり合い、ともに学びを高めていくことは小さな社会である。

話し合いで合意形成していく場合は、将来社会の一員として行われる議論の場と同じものであることから、さらに教材研究を丁寧に行い、教科内容に即したものを教材化していくことも必要である。

最後に、「6C長期総合計画」を県庁に提出していたあと、授業を振り返った頃の作文を紹介する。

長期総合計画を書くときに、漢字じゃないと注意されたりしたけど、楽しかった。社会の授業を1年間（近く）受けてきて思ったより面白くて好きになりました。

5. 1. 3. 教師のデザイン力と教師の出

今回の2つの授業の事例でも、深まっていない子ども、混乱した子どももいた。しかし、そうした一見回り道をするこども、子どもの思考や追究を深めていくことは大切な過程であると考えている。

課題としては、1対1の質問や対応が多かった。多くの考えを出し合うことはできたが、そこにとらわれて、一つ一つの考えの検討が丁寧に行われなかったため、新たな方向性を生み出すには時間がかかった。そのためには教科内容やつきたい力をもっと意識して、子どもの考えを引き出したり、こちらから整理したりしていくことも教師の重要な役割である。また、自分の見方や考え方を表現し合い、友達と比較・交流することによって、考えが相対化され、より公正かつ客観的なものの見方ができるようにするために、練り上げが必要であった。

問題解決学習の解決では、わかりやすい解決や共通の答えを得ることを目的としているのではない。初期社会科の理念である民主的な社会を形成するため、一人一人の個が自立できるように育成されることを目的としているのだ。しかし、その理念とは違い、問題解決学習という名のもとに、多くの実践でも知識を調べてまとめて発表する学習活動がされていることも多い。そういった実践と一線を画すためにも、授業デザインは教科書や教師のプランからではなく、教科の系統や蓄積を問い直しながら科学的認識を育てていく有用性についての修正が必要であった。その中で、社会参画を取り入れた実践をすることにより、学習を追究していく過程で切実になっていく子どもたちの姿を見ることができた。つまり追究過程で「切実になる」社会科の学びもあるのだ。

もちろん、どのクラスでも同じ問題で追究することで、追究の意欲が高まるということはない。しかし、子どもが本物の問いを見つけ追究する力を育てていく実践により、複数の情報を比べたり、関連づけたりする思考もうまれる。また、追究していく過程では子どもによって差があるため、一人一人に寄り添った教師の支援が重要である。

社会科の学習で学んだことを生かし、よりよい社会の形成に子どもたちなりに関わっていくという体験をさせることで、自分と社会とのつながりを実感し、自分なりに社会の様々な事象に関わっていこうとする態度も養われる。そして、社会と関わる力はその名の通り、社会に働きかけていく実践的な活動のもとでこそ、育成されるものである。

5. 2. 授業モデルの発展

本研究で開発した授業は、まだまだ不十分どころが多々ある。今まで述べてきたように、初期社会科における問題解決学習では、問題解決過程を構成するこれ

らの諸要素についての厳密な分析と究明が、極めて未分化で不十分なものとどまってしまうために、さまざまな疑問や批判が生じてこざるをえなかった。

こういった論理的な未分化や不十分なものを克服していくことのできる新しい問題解決学習を確立するために、教育内容と教育方法に位置づく「教材」、それらの認識をとおしてどのような意味を見出すかという「教育内容」を明確にして、社会認識を高めていく必要のあることがわかった。そして、社会認識を高めるためにも、問題解決学習には問題の発見や把握、追究、解決だけでなく、実社会・実生活の問題を指摘することやその問題の解決に向けて解決策を提案したり説得したりするなど「実社会や実生活に参加・参画する力」を含めて問題解決力を育てていくことが社会認識の深まりにつながることも明らかになった。

そのためにも、一つの型にはめることなく、教育内容を複数の教材に反映した授業デザインを構築する必要性を感じた。

今までの課題から、今後、授業モデルを修正し、発展していくために、以下の2点を工夫していきたい。

- ① 地域の特色を明らかにする地域教材の開発だけでなく、社会事象あるいは他の事象の因果関係を明らかにする。本研究の授業のみならず、日本・世界の因果関係についても説明的知識を獲得できるのかについて検討する必要がある。それが角度をつけた地域教材の開発につながる。
- ② 学習者が社会的事象を獲得するためにも、調べ方の紹介や多くの資料を用意し、その中から仮説の検証に必要な資料を選択させることで、社会認識を深める工夫を行う。

最後に、本研究に基づく授業は社会科の目標を達成できるだけでなく、「思考力・判断力・表現力」や「社会形成力・社会参画力」といった次期学習指導要領のキーワードにも対応できるものである。

本研究で開発した授業を充実、発展させていくことを進め、一人でも多くの子どもが社会科好きになり、多面的・発展的な思考力を育むために研究・修養に努めていきたい。

参考文献

- 文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領」
安野功 (2006) 「社会科授業力向上5つの戦略」
東洋館出版社
(2012) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 36
(2013) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 37
(2014) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 38